

今も昔もコレクションの スタンスは変わらない

精神科医として活躍する一方、日本を代表する現代アート作品で構成された「高橋コレクション」でも知られている高橋龍太郎氏。そんな高橋氏に、アート・コレクターという側面から話を聞いた。自らのコレクションの現状や今後の展望について、日本のアート界についてなど、高橋氏が今、何を感じているのかがわかるインタビューとなったのではないだろうか。

——90年代以降の日本のアートを中心に蒐集されていますが、作家と作品、どちらに惚れ込んで購入されるのでしょうか。
高橋：作品ですね。作家に入れ込んでということとはあまりないです。かといって、作品だけで追い求めれば日本中旅して歩かなきゃならない。僕にとって作家名は索引みたいなものだから、ある程度自分の中でイメージする30〜40人の個展があ

れば必ず顔を出すようにしています。

——コレクションは、絵画や彫刻など多岐にわたっていますが、特に好きなジャンルはありますか？

高橋：特にはありません。ただ、個人コレクターは必ず收藏という問題に突き当たります。平面作品が便利という点で、

個人コレクターは絵画や写真に特化しますが、そう考えると僕の場合は映像や彫刻など、普通のコレクターがあまり手を出さない領域まで、手を広げているように思います。

——コレクションを長く続けてきて、過去に購入された作品と比べ、現在購入す



クリニックの待合室には、様々なアート作品が飾られている

